

167 真珠の永遠の輝き (2023 年 6 月 13 日)

先日、日本の化学者・池田菊苗博士がうま味を発見したことをご紹介しました(※)。池田博士は、日本の特許制度が 100 周年を迎えた 1985 (昭和 60) 年に、日本の特許庁が選んだ「日本の十大発明家」の一人です。この十大発明家の中には、御木本幸吉 (1858-1954) もいます。池田博士が特許を取得した 1908 年から遡った 1896 年に、御木本幸吉は真珠養殖の技術で特許を取得しました。

真珠とは、貝の体内で作られる宝石です。貝の中に異物が入り込むと、貝は身を守るためにその異物を包み込もうとして、貝殻と同じ成分である炭酸カルシウムが分泌されます。その成分で異物が何層にも包まれて丸く形作ったものが真珠です。色は、クリーム色、薄いピンク、イエロー、ブルー、グレー、ブラックなど様々な種類があります。真珠の主な産地は、日本、中国とオーストラリアの沿岸で、仏領ポリネシアは、黒真珠の世界的な産地として有名です。日本の真珠は、日本近海に生息するアコヤ貝から採れるものが多く、クリーム色や薄いピンク色で小さめの美しい円形が特徴です。



日本では、古代から真珠を利用していたことが分かっています。約 5500 年前の縄文時代の貝塚から、加工した真珠が発見されました。また、専門家によれば、8 世紀に編纂された古事記や日本書紀でも真珠に言及されています。御木本が生まれた志摩国 (現在の三重県) は真珠の産地でしたが、19 世紀には、真珠の乱獲で絶滅の危機にありました。また、天然真珠は 1000 個の貝の中に一個あるかないかというくらい大変希少で高価なものでした。

真珠の魅力に一早く気付いた御木本は、真珠の養殖を始めました。度重なる赤潮や資金難に見舞われたものの、1893 年に半円真珠の養殖に成功しました。そして、1907 年には、御木本の娘婿であった西川藤吉や見瀬辰平らが、真円真珠の養殖に成功しました。

御木本は、ロンドンやパリでも養殖真珠の販路を広げていきました。天然真珠よりも安価で質の高い日本の養殖真珠が、次第にヨーロッパの宝飾市場を席捲するようになりました。1921 年に「日本の真珠商人が扱っている養殖真珠は、天然真珠の模造品であり、それを売るのは詐欺商法だ。」と伝える記事が、ロンドンの新聞に掲載されました。パリでは、養殖真珠が本物かどうかをめぐって、裁判に発展しました。この裁判において、研究者が養殖真珠は模造品とは言えな

いとする見解で概ね一致したことから、日本の養殖真珠は再び世界市場で流通しました。

しかし、同時期に発生した世界恐慌で、ヨーロッパにおける真珠市場は、壊滅的な被害を受けました。その危機を救ったのが、ガブリエル・シャネル（ココ・シャネル）（1883 -1971）です。シャネルは、女性のファッションに大きな変革を与えました。一つは、スカートとジャケットを組み合わせた機能的なスーツを生み出したことです。また、シャネルは、喪服の色であった黒を女性のファッションに取り入れました。リトル・ブラック・ドレスと呼ばれる黒いシンプルなデザインのドレスに最も合うアクセサリーとしてシャネルが考えたのが、パールのネックレスでした。黒いドレスと長く垂れ下がったパールのネックレスの組み合わせは、シャネルを象徴するスタイルの一つとなりました。シャネルは、本物の真珠よりも廉価なイミテーションパールを使い、高価で一部の富裕層しか身につけることができなかった真珠を身近なものにしました。シャネル自身も、しばしばパールを身につけました。イミテーションパールが普及したことで、養殖真珠を含めた本物の真珠の需要が減ったと考える人もいます。しかし、イミテーションパールが普及しなければ、本物の真珠は忘れられてしまい、日本の養殖真珠産業も廃れてしまったかもしれません。イミテーションパールは女性のファッションを豊かにしました。



真珠の輝きは、今も世界中の女性を魅了しています。



ナポレオン三世の皇后
ウジェニーの王冠
（ルーブル美術館蔵）